



天安門事件一周年を迎える中国は、依然として民主化抑圧の強権政治、いや恐怖政治のただなかにある。天安門事件の悲劇を代償として、東欧諸国に起こり、ソ連の改革を促し、ついにモンゴル人民共和国にまで波及した社会主義体制崩壊への歴史的潮流を必死に防衛しようとしている中国共産党の一元支配体制は、いままなお固持されてはいるものの、地下に潜行し、あるいは全世界の中国人社会に連帯の輪を広げた民主化運動の火は、さまざまな困難のなかで、依然として燃え続けている。

建国四十周年にして起こった天安門事件の悲劇は、それが五・四運動七十年周年記念、フランス革命二百周年という近現代史の節目に生じたことにおいて、また、戦争と革命の世紀とも言える二十世紀もいよいよ残り少なくなつつある今日の世界で起こった事件だという点において、近現代社会の表象でもあった革命(レヴォリューション)とは一体何なのかという根本問題を私たちに深刻に突きつけた。

制、保守と革新といった常套語のもつ含意は根本から変わってしまった。

いずれにせよ、近現代社会の革命を導いたマルクス主義は、そのあまりにも多すぎる負の遺産のゆえに、いよいよ消えていく運命にある。そして歴史の現実を直視すればするほど、マルクス主義から離脱することこそが歴史の進歩であることに、人類は誠実かつ素直に対応しなければならぬ。

# 中国革命の終焉

## —天安門事件 1 周年に際して

なってきた。

それにしても、フランス革命二百周年の一九八九年が中国における血の大虐殺によって祝われたことは、まさに皮肉な歴史的現実だといわねばならない。なぜなら、中国においてはかつて中国共産党の創立者の一人であった李大釗が「ボルシェビズムの勝利」と題する論文を書き、来るべき中国革命に仮託してこう述べていたからである。

「一七八九年のフランスの革命は単にフランスの人心が変わったあらわれであるだけでなく、実は十九世紀の全世界人類の普遍的心理学が変わったあらわれである。一九一七年のロシアの革命は、単にロシアの人心が変わった兆しであるだけではない、実は二十世紀全世界人類の普遍的心理学が変わった兆しなのだ。……ボルシェビズムの精神は、二十世紀全世界人類の人々の心の中に共通に目覚めた精神である」(『新青年』第五巻第五号、一九一八年十一月十五日)と。そして今日の社会主義世界の現実を顧みたと、ボルシェビズムが、二十世紀全世界人

類の共通の精神といえるであろうか。周知のようにフランス革命は「自由・平等・博愛」のスローガンの下に遂行されたのだが、やがてロベスピエールに率いられたジャコバンの独裁をもたらした。血なまぐさい恐怖政治を招来した。そのようなことを考えるとき、フランス革命からロシア革命、そして中国革命への経過の中に、恐怖政治の綿々とした系譜を見ることができるのである。

私がたまたま昨年九月、マルクスゆかりの東ベルリンのフンボルト大学での天安門事件をめぐるセミナー、パリでの中国民主化を

めぐるセミナーに出たのちロンドンに滞在していたとき「フランス革命と英国」という特別展覧会が大英博物館でおこなわれていた。そのポスターには「自由」とか「法」とか「人権」とか書かれた何冊かの本を踏み台にしてギロチンの断頭台で処刑された犠牲者の首をかせしている図柄が描かれており、強く私の印象に残っている。

思えば、「自由」や「人権」という近現代の普遍的な価値を生んだ背景には、革命の担い手に異を唱える者はことごとく「敵」として暴力的に抹殺してもよいのだという思想がかくされている。フランス革命に多

大の影響を与えたルソーの「一般意志」に基づく直接民主主義・人民主権の思想に関しても、そのようなことが言えなくはない。こうして、天安門事件での「反革命暴乱」という鄧小平発言が如実に示したように、苦難の中国革命を勝利に導いた革命第一世代としての自分たちこそつねに民意を代表し、民衆のために権力を行使しているのだというその主観的判断によって、民衆の枠から外れたと見做す人々には徹底的な暴力を行使して彼らを抹殺してもよいのだという思想は、ある意味ではフランス革命の悪しき一面の継承であり、それがまさにロシア

### 中嶋 嶺雄



なかじま・みねお 東大京外国語大教授(現代中国学) 一九三六年、長野県松本市生まれ。東大大学院修了。北京烈烈で八一年度サントロイ学芸賞を受賞。著書に「現代中国論」「香港—移りゆく都市国家」「中国に呪縛される日本」など。

革命からスターリンの粛清を導き、中国革命から文化大革命、そして昨年の天安門「血の日曜日」事件にまで及んでいると言えなくもない。そして、こうした革命思想の系譜の影響下で、カンボジアのあの虐殺も起こっていることを考えたとき、マルクス主義の名による革命国家の形成がいかにコストが大きいかを二十世紀の人類は学んだのである。

そのような代償のかわりに経済が解放され、人民が本当に豊かになったと言わなければ、これらの血の犠牲も報いられると思うが、こうした代償にもかかわらず、経済が著しく停滞し、人権も大きく抑圧され、民主も損なわれている今日の社会主義の現実を直視するとき、まさに二十世紀はマルクス主義に対して、その

終焉をすでに宣言したと述べても過言ではあるまい。そのかぎりにおいて、中国の革命もすでに完全

に終焉したのである。天安門事件は、その意味でもまさに歴史的な出来事であった。